



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1985 精道教育促進協会 (〒芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

洗礼は、 より高い生活の源

罪の状態からの解放を伴う神的生命の伝達

1 数日前にお祝いした主の洗礼の祝日は、主が人々の前で秘義をお現わしになり、救い主としての公生活の始まりをしめされたあのでき事を思い出させてくれます。

先ほどの福音書の記述は、最初から、洗者ヨハネの説教とイエズスの説教との間にあるつながりを明らかにしています。イエズスは、あの悔い改めの洗礼をお受けになることによって、自らの使命と、キリスト来臨の真近きことを告げる先駆者の予告との間に、密接なつながりをもたせるご意向を示されました。イエズスは洗者ヨハネについて、預言者たちの最後を飾る人で、預言者よりもすぐれた人と考えておいでになる。なぜなら、洗者ヨハネはキリストへの道を開くという使命を与えられてつかわされた者であったから。

洗礼を受ける、この行為の中に、イエズスの謙遜があらわれています。自らの使命が世界の歴史を大きく変動させるものであることをご存じでありながら、神の御子イエズスは、

過去との関係を断ち切る決意で聖務を始めるのではなく、先駆者に代表されるユダヤ民族の伝統の流れの中に自らをおかれる。この謙遜は、聖マテオによる福音書の中で特に強調されており、「私こそあなたから洗礼を受けねばならぬ者ですのに、あなたの方から私のもとに來られたのですか」(3・14)という洗者ヨハネのことが書き留められています。イエズスはこれにお答えになり、正義の王国、すなわち神の聖性の王国をこの世界に築くという自らの使命が、このふるまいの中に反映されていることをお教えになりました。「今はこうさせよ。こうして私たちはすべての正義をまっとうせねばならぬ」(3・15)

象徴的なふるまい

2 人間の中に聖化のわざを成し遂げようとのご意向は、洗礼という行為を生き生きとしたものにし、その深遠な意義を理解させます。洗者ヨハネが授ける洗礼は、罪のゆるしをも

とめる悔い改めの洗礼であって、自らの罪を認め、回心し、神を頼りにする人々にふさわしいものでした。それゆえ完全に神聖で汚れないイエズスの場合は立場が異なります。イエズスが罪の赦しのために洗礼を受けるといふようなことはありえませんが、もしイエズスが悔い改めと回心の洗礼をお受けになるのなら、それは人間の罪の赦しのためです。イザヤの書の神のお告げの中で苦しみをうけるしもべについて預言されていたことが、その洗礼においてまさに現実のものとなり始めたわけですから。そのしもべは、そこでは、人間の罪の重みを背負い、罪人のために神の赦しを得るため自ら犠牲となる正しい人として描かれています。(53・4〜12)

それゆえイエズスの洗礼は、人間を清めるために犠牲を捧げるといふイエズスの公約を示す、象徴的なふるまいなのです。その瞬間、天が開いたという事実によって、神と人間との間の和解のみわがが始まったことがわかります。罪のために天は閉ざされていましたが、イエズスは再び天と地との交信を打ち立ててくださる。かくてイエズスの上へ下った聖霊は、神と人間との間の契約を元通りにするというイエズスの使命すべての導き手となるのです。

罪からの解放

3 福音書が私たちに教えているように、洗礼は、イエズスが神の御子であられることを明らかにしています。父なる神は、御自ら喜びとされるいとし子を、ほめたたえておられます。それは明らかに、託身の秘義、ことに贖いのための託身の秘義を信じるようにとの神の呼びかけのお声なのです。なぜならそれは、罪の赦しを得て世界に和解を与える犠牲となるために用意されているからです。実際、イエズスが後に弟子の二人に「あなたたちは私の飲む杯を飲み、私の受ける洗礼を受

けることができるのか」(マルコ10・38)とおたずねになり、この犠牲を洗礼と呼びになった事実を無視することはできません。ヨルダン川でのイエズスの洗礼は前徹的なものですが、十字架架でのイエズスの洗礼は、世界を清めるための洗礼ということになります。まずヨルダン川の水の中で示され、カルワリオにおいて成し遂げられたこの洗礼を通して、救い主は、キリスト信者の洗礼の基礎をお築きになりました。教会で行なわれる洗礼は、キリストの犠牲に由来しています。洗礼とは、キリスト信者となって教会に入るすべての人に、この犠牲の果実が分け与えられる秘跡、すなわち、罪の状態からの解放を伴う神的生命の伝達なのです。

水による清めの儀式である洗礼式は、ヨルダン川でのイエズスの洗礼を思い起こさせます。神の子としての尊厳を新たに洗礼を受けた人に授けるため、洗礼式はある程度までの最初の洗礼、つまり神の御子の洗礼を再現しています。けれどもまた、洗礼式は、十字架上でさげられた犠牲の力によってその効果を生み出すということも、忘れてはなりません。洗礼を受ける人すべてに分け与えられるのは、カルワリオにおいて達成された和解なのです。

ここに重要な真実があります。すなわち、洗礼は私たちが救い主の死と復活にあずかる者にする事によって、新しい生命で私たちがをみたくれるということ。それゆえ私たちは罪をさげなければなりません。あるいは使徒パウロの表現をかりるなら、「罪に死に」、「キリスト・イエズスにおいて神のために生き」なければなりません。(ローマ6・11)

キリスト信者の生涯にとって、洗礼は、より高い生活のみなものです。キリストにおける父なる神の子であるゆえ、神の似姿をもっているはずの人々におとずれる生命の。

(一九八四・一・十一)



贖いの力と ご聖体

1 「その血をとって、それを食べる家の戸の、二つのかまちと、かまいとに塗りなさい。」
(出エジプト12・7)

典礼の第一書簡には、旧約の過ぎ越しの晩さんについての規則が詳しく書いてあります。小羊の死は、エジプト人の奴隷の状態からみ民を救い出した神、その神の力を示すしるしとなりました。焼いた肉(同上8)を急いで食し、主が「エジプトをお通りになるとき(同上12)、すぐ出立する準備をしなければなりませんでした。腰に帯を締め、サンダルをはき、手にはつえを携え、小羊の血を「家の戸の、二つのかまちと、かまいとに塗るのです。」
ところで、この血は、イスラエルの初子を死から救うしるしとなりました。ちょうど、死がエジプト中の初子を打ちのめした頃のことです。

古い契約の伝統によれば、奴隷からの解放は、過ぎ越しの食事の儀式と深い関わりがあります。それは、小羊の宴でした。小羊の死のおかげでイスラエルの子らは死から救われたからです。

聖なる三日間

2 本日は聖なる三日間の始まりです。新しい契約の水平線上に、「世の罪を除き給う神の小羊」があらわれました。洗者ヨハネがヨルダン川で洗礼を授けるときに指し示した(ヨハネ1・29参照)その神の小羊が。これは同

時に、イスラエルにおけるナザレトのイエズスの救い主としての使命の始まりをも示していました。
聖なる三日間。そして、過ぎ越しの子羊についての旧約の前表が、新たに、決定的に、実現するときに訪れます。

ところでイエズスは、「父が自らの手に万物をゆだねられた」(ヨハネ13・3)ことを知っておられました。

イエズスは、「悪魔が早くもイスカリオトのユダの心に、イエズスをわたそうという考えを入れた」ことも存じていた。
にもかかわらず、「食卓から立ちあがって、上衣をぬぎ、弟子たちの足を洗いはじめた」(ヨハネ13・4、5)、まるで召し使いのようにな

聖金曜日の典礼と共に、十字架上の犠牲が成就します。十字架上の犠牲において、神の小羊の秘義は最後まで実現されねばなりません。贖いの秘義の内容を全て実現させねばならないのです。

愛の秘跡

神の小羊のうちに実現された贖いの秘義は、教会の宝、愛の秘跡として残らねばなりません。これは、過ぎ越しの晩さん、つまり食事の儀と関係があります。悪からの解放、罪と死への隷属状態からの解放は、神の小羊の死を代償としなければなりません。贖いの秘義における解放はまた、過ぎ越しの宴にもつながっています。

主イエズスは、パンを取り、「感謝してのちそれをさき、これは、あなたたちのための私の体である。私の記念としてこれを行なえ」とおせられた。(コリント①11・24)

それから、さかずきを取り、「このさかずきは、私の血における新しい契約である。これを飲むごとに、私の記念としてこれを行なえ」とおせられた。(同上25)「まことに、

あなたたちは、このパンを食べ、このさかずきを飲むごとに、主が来られるまで、主の死を告げるのである。(同上26)

このように、パンとぶどう酒の秘跡は、永遠に、神の小羊という現実を含んでいると言えます。

いな、むしろ、神の小羊という現実が、キリストの死によって世の贖いを成就させ、最後の晩餐(過ぎ越しの食事)中に制定されたパンとぶどう酒の秘跡を含んでいる、と云うべきかもしれません。

福音宣教

われらの主キリストを情熱こめて愛さなければならぬ。キリストの真の弟子、怠りない模倣者、謙遜な後輩、忠実な友、何ものをも恐れぬ証人、疲れを知らぬ使徒となるために。

祈り

みなさんもよく存じのように、イエズスは公生活を始める前に四十日間荒野に退いて祈りに専念された。若いみなさん方にも、毎日すこしでもよいから、沈黙の時を作り、熱心に考え、反省し、祈り、しっかりとした決心をたてるために使って欲しい。

黙想のしおり④

「お告げの祈り」もロザリオと共に、すべての信者、なかんずく信者の家庭にとって、勇気と信頼を取りもどすために立ち寄る日々の霊的オアシスである。

典礼

「主を求めよ。」やむことなく常に、主を捜し求めなければならぬ。しかし普段よりも一層激しく主を求めるときがある。それはとくに主が私たちの近くににおいてになるとき、従って、見つけ易いときである。教会の呼びかけに応えて主が近くに居てくださるときのことであり、それは典礼において実現する。というよりも、典礼こそ、主を私たちがかたわらに引き寄せるときなのだ。

今も同じ力

3 同様に教会は、代々にわたり、日々、パンとぶどう酒の外観のもと、主の晩餐の秘跡のうちに同じ贖いの力をみつけます。

至聖なるこの秘跡を祝う毎に教会は、「これが世の罪を除き給う神の小羊である」と信仰を告白します。キリストの御体と御血の秘跡のおかげで、教会は、たえず贖いの秘義の核心に位置する自分を知るので。
(一九八四・四・十九)

みになる使命を引き受ける力が得られる。

決して祈りをやめないで欲しい。一日として祈らぬ日のないように。祈りは義務であると同時に大きなよろこびである。祈りはキリストを仲介者とした、御父との語り合いであるから。毎日曜日は「ミサへ、できれば週日中にも何度か。毎日、朝夕の祈りとその他適当なときの祈りを怠らないようにしよう。

説教・講話・書簡等の抄記



十字架の道行 ★聖金曜日

1 「見よ、十字架の木、世の救い。共にあがめ、称えよう。」 今日、聖金曜日、十字架の礼拝のためにコロシウムにまいりました。(…)

私たちの居りますこの地が、キリストの十字架という特別な言葉で「私たちに話しかけて来ます。この地に立つと、何世紀も前のキリスト信者迫害の時代を思い出します。

よくご存じのように、ここは、野獣と剣士をまじえて残酷な競技が行なわれた所でした。その後、敬虔なキリスト信者たちがこの地を祈りの場所にしたのは比較的最近になってからのことでした。イエズスのご愛難と、ローマ各地の迫害で殉教したキリスト信者たちへの信心のために奉獻されたのです。教皇ベネディクト十四世が、一七五〇年の聖年を終えるに当たりコロシウムの中に十字架の道を設けてこの習慣を確定的にしました。本年も、十字架を通して成就された人間の贖いを記念して、この敬虔な祈りを続けましょう。

殉教者たちの証言

2 (…)

キリスト教ローマの殉教者たちの証言が、深い意味を帯びて雄弁に私たちに語りかけ、聖アンブロジオの言葉「流血の中の栄光」(エフェソ18・11)を思い出させます。

(…)

キリストが初めて通った道、十字架による新しい永遠の契約の道、その道を私たちに先立ってたどって行った人々をごらんください。彼らは英雄的な犠牲のしるしを残してくれました。彼らの中で「死と生はふしぎな戦いで互いに対抗した」。人間の目には死が優勢であつたかに見えたが、贖いという摂理によれば、彼らは満ち足りた生を得たのでした。

私たちは殉教者たちが今この場に現存していることを特に深く心に留めたいのです。十字架のキリストから生じた実りそのものである彼らの功徳を引き継ぎたいと思います。この信仰をもって彼らの殉教について黙想し、使徒と共に敢えて言うならば、殉教者たちは自分たちの苦しみをもってキリストの苦しみの欠けたところを満たした(コロサイ1・24参照)ことを黙想しましょう。

こうして、彼ら自身キリストの十字架の御力によって贖われたように、救世の泉の近くへと私たちをひきよせ、その泉の水をたっぷり飲むことができるよう助けられますから、いま苦しんでいる人々

3 キリストのために生き、キリストのために命を捧げる覚悟でいた初代のキリスト信者のことを思い浮かべるとき、コロシウムのこの十字架の道にいて、忘れることができないのは、現在、世界の様々な場所でキリストのために生き、キリストのために自分の命さえも捧げる決心をしている兄弟姉妹の皆さんのことです。

教会の中心に不思議な方法で現存しているそのような人々こそ、ローマのコロシウムに集った私たち全員の記憶と祈りの中に、まさに特別に現存しているにちがいありません。

昨年、ルルドへの巡礼の間中、キリストの御母のみ前で、私はキリスト教を信じているがために苦しみを余儀なくされている兄弟たちを思い出してください。

ちを思い出してください。

「現在、信仰の証人となる幾千万人も人がいますが、大部分は世に知られず、あるいは世論から忘れ去られています……この人々のことを知っているのは神様だけという場合が多いのです。彼らの大部分は各大陸の広範囲にわたるあちこちの地で、毎日の苦難に耐えています。彼らは、信仰共同体が公認されていないため会うことさえこつそりとでなければならぬ信者たちです。それぞれの教会や公の会合で、牧者として活動するのを禁じられている司教、司祭、修道者たちが沢山います。離ればなれにされて奉獻生活をするのでできない修道女たちもいます。信仰の召しだしを受けても、それを遂行するための神学校や修練院等に入るのを妨害されている高適な若者たちもいます。兄弟姉妹のために、祈りと愛徳に専念する生活に我が身を奉獻したくても出来ないように拒まれている若い婦人たちがいます。」

また教皇書簡「苦しみも救いの力」ではあらゆる形の苦難がもつ福音的意味をとりあげ、こうしたいろいろな苦痛に満ち、かつ難問を背負わされた証人の立場に言及して、次のような言葉をのべました。「従って、キリストを信じて苦しんでいる人々全員、特に十字架につけられそして復活なされた御方を信じているがために迫害をうけている人々が、心の中でカルワリオの十字架の下に共に集い、その数多の苦しみを捧げることによって、すべてのものが一つになるようにと願われた救い主御自らの祈りが、一日も早く成就するようになさなければなりません。(No.31)」

信仰のために苦しい目にあっている兄弟の皆さんは誰でもキリストの十字架の中で特別な「役割」を持っています。(…)

そして、十字架につけられてよみがえられた主イエズスと一致してそこから救いをもたらす霊的な宝を、引き出すと同時に作り出すのです。

4 「見よ、十字架の木、世の救い。ごらんください、この木を。この上で生ける神の御子キリスト、ナザレトのマリアの子キリストは、世の救いを成し遂げられました。」

本日教会は救いをもたらすこの木を礼拝し、へりくだって訴えます。 O Cruz, ave, Spes unica! 「おお、われらの救いの十字架よ、けだかい十字架の木、…枝を垂れて、やさしくいただき、幹の堅さをやわらげて偉大な王の手足をつつめ。」(『十字架賛歌』)

十字架は、キリストの御体が息絶えるまで抱きしめ支え、ついに「すべては成し遂げられた」のです。そしてその時、御なきがらは悲しみにうちひしがれる御母に返され、十字架につけられた御方の葬りが始まるのです。

神の御子の御体を亡くなられるまで抱いていた十字架の秘義は、この世の歴史の中でずっと続いていきます。

そして贖いの栄光もまたカルワリオの十字架とつながって永久に続いて行くのです。

ですから教会は、そして、このはかりしれない秘義を管理するには値しない者ではありませんがローマ司教は、過去の人々、未来の人びとに対して大声で呼びかけます。特に現代のすべての人に対して声を大にして叫びます。礼拝に来なさい。 Venite adoremus!

すべての地の果てから「すべての大陸から、あらゆる国民あらゆる民族から、あらゆる言葉あらゆる文化の国々から、来りておがめよ」と。あらゆる年齢、すべての職業の人々、人生経験をどの位つんでいようと、生活水準がどれ程であろうとも、良心のしかかる重荷がどんなものであっても、あなたの精神を脅かす空しい思いが何であつても、さあ、皆さん、いらっしやい!

この世の歴史と離れ難くつながっているキリストの十字架を、一緒に礼拝しましょう。神の御子が亡くなられた十字架を、一緒に礼拝しましょう。(一九八四・四・二〇)

不変の教え

日々の苦しみを通して

聖年、聖扉、聖所、聖週間などにみられるように、「聖」という言葉を、現実存在する場所や時節にあてはめる習慣が昔からあります。ということは、一般大衆、それに教会もそのような時や場所と神との間に特別なつながりのあることを発見し、またそれを認めているということだと思います。これが聖別です。

私たちキリスト信者が聖週間に特別聖なる価値を認めるのは、その期間がキリストの受難と死去に由来するからです。聖週間は、普段よりも一層生き生きとした信仰、鋭い心と自己に厳しい意識的な信心に努めます。典礼の面からも霊的な面からも贖いの秘義に一致します。日々唱える信仰宣言にあるように「苦しみを受け十字架につけられ、死して葬られ……」と。

そう今は十字架のとき。世代から世代へと引き継がれ、あらゆる時代の無数の信者がくりかえし口ずさんできた、いにしへの典礼聖歌を我知らず口にする時です。

十字架はキリストの旗じるし。それゆえ、十字架を礼拝し、十字架をたたえて祈ります。御父のご計画により、十字架は贖いの道具としてそれにかげられた御方と密接に結びついているので、私たちは十字架を神であり人間である方と同じように礼拝します。十字架を崇めるとは実にキリストご自身をあがめることでもあります。主キリストよ、御身をあがめます。御身は聖十字架をもって世を贖ってくださいましたから。

悪の問題

日頃の経験から明らかのように、十字架は

私たちの存在そのものと関わりをもっていきます。というより、十字架は被造物の本質に根ざしているというべきでしょう。

人間は、自らの価値を知ると同時に、自らの限界にも気づいています。ここで、悪の問題がでて来るわけです。物理的、心理的、精神的不秩序という条件のなかで、悪は苦痛、苦しみ、ひいては罪となる。なぜ悪が存在するのか、なぜ苦しまねばならぬのか、なぜ十字架を背負わねばならぬのか。十字架は人間と切っても切れない関係にあるかのようにあるが、往々にして、まことに馬鹿げた事柄のようでもある。

人間はこれらの疑問に対決し、苦悶し続けてきました。頭のなかではある程度まで解決したはずであるが、日々の営みにおいては委細かまわず飛び出してくる疑問。ときには劇的な様相で迫ってくる。罪なきものが苦しみ、子供やあるグループや民族に、彼らには太刀打ちできない圧力がかけられ、あたかも悪が勝利を得たかのように見られる。

数多くの痛ましい現実と無数の十字架を目のあたりにして、胸の締めつけられる思いがします。

たしかに私たちは、苦しみからも得るものがあることを、経験から知っています。苦しみを身をもって体験することで、成熟し、知恵を増す、また一層善良になり、他人を理解する心ができ、人々との一体感、連帯感をもつようになる。これらは、苦しみと与えるものりであると言えるでしょう。

しかし、これだけではまだ、問題が根本的に解決したとはとても言えません。ヨブが受

けたような誘惑は今なお、私たち信者を脅かしています。神に対して、「なぜ」と問いかけても、いいような状態にはなっていないのです。

苦しみと悪の問題は、大勢の人々が神の存在を疑う契機となり、神の摂理に反感を抱かせる原因となっています。彼らにとって、十字架はつまずきなのです。なぜつまずきな

□キリストのつけられてある十字架は、日々の生活や歴史に現われる十字架の価値や苦しみの意味を教えてください。十字架は無限の神愛の証しです。

でしょうか。

実は、このような人々の考える十字架が、キリストのいまさぬ十字架であるからです。キリストのいまさぬ十字架は、何よりも重く、耐えがたく心にのしかかる恐ろしい十字架、ときには悲劇のもとともなります。

十字架の道行

キリストのつけられてある十字架。それは、日々の生活や歴史に現われる十字架の価値や苦しみの意味を教えてください。十字架の価値を理解し両手をひろげてそれを受け容れる人は、神に抵抗し神と競うような生き方をする人とは、全く異なる道を辿ると言えます。受け容れる人は、キリストへの道を歩む過程で、十字架の主に向かうことの意義を改めて見出すことでしよう。これが十字架の道行なのです。

十字架は、限らない神愛の証しであります。人間を限りなく愛する心から、自らを犠牲と

し、それを世界の修復と人々の贖いのはじまりとしてくださいました。主は、償いと平和を得るための犠牲でありました。キリストは、少なくとも罪のもとから、苦しみや悪から、死から、私たちを救い出してくださいました。

十字架は、愛に愛をもって応えよ、と招いています。私たちを先に愛してくださいました神のために、今度は私たちが救いのご計画に参与する時です。人生の道標である「苦しみ」が、主のご計画においてどんな役割を果たすかをいつでも説明できるとは限りません。けれども、信仰という支えに頼るなら、これが愛に基づくご計画だと確信できるでしょう。大きいもの・小さいもの、ありとあらゆる種類の十字架がとけあって、一つの十字架を作るのです。

ですから、私たちにとって十字架とは、生命と復活と救いの保証にほかなりません。十字架自体にキリストの救いの力があり、その力に信者は与えることができるからです。聖パウロも述べているように、十字架によって未来の復活と天の栄光は手に入ったも同然なのです。復活と栄光はキリストがご受難とご死去によって獲得してくださった勝利のあらわれでありますから。

私たちは、日々の苦しみを通して、この秘義に与るよう召されています。それは確かに苦しみの秘義であります。同時に栄光の秘義でもあります。(…)

ご受難節の間、しばしば、十字架とはりつけにされたキリストに心を向けましょう。典礼上そうするのがふさわしい時期だからというだけではありません。歴史的、社会的、精神的にみて、いま世界中に、無数の苦痛と苦難、さらに悲しいことに、キリストのいまさぬ無数の十字架があるからです。(八三・三三〇)

《おわび》二月号の一三頁に誤字がありました。「悔俊」を「悔俊」にご訂正ください。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円

郵便振替 神戸 3-72393